

講 演 録

「海の信頼醸成にむけて」

静岡文化芸術大学学長
川勝 平太

(於. 海運ビル 2 階「海運クラブ ホール」)

平成 19 年 12 月 4 日 (火)

【川勝】 松尾日本海事センター会長、ご列席の皆さま、お招き賜り光栄です。コーヒーブレイクの後が本番のようで、その露払いをさせていただくことになりました。どうぞ気楽にお聞きください。今、松尾会長からお話がありましたように、海洋基本法が施行され、現在国連海洋法条約の下で、大陸棚の調査が行われております。ご承知の通り、日本の領海は43万平方キロメートルほど。EEZ（排他的経済水域）は400万平方キロメートル強ですから、領海とEEZを合わせれば、国土38万平方キロメートルの12倍になります。それに加えて、目下、深海底を
探査中の「ちきゅう」の大陸棚の報告が楽しみです。

日本は海に囲まれた国とよく言われます。むしろ「海に開かれた国」と言ったほうがいいと思います。また日本は、よくアジアの国という言い方がされますが、アジアを大陸アジアと海洋アジアと区別し、日本は「海洋アジアの国」という自己認識を持ったらどうかと思っています。

今日のテーマは「海の信頼醸成」ですが、たまたまNIRA（総合研究開発機構）という30年以上の歴史を持つシンクタンクが『東アジア海の信頼醸成』という報告書をまとめました。この報告書の総括を仰せつかり、11月に出たばかりで、松尾会長に差し上げておきますので、機会がありましたら、ご覧ください。中国、台湾、東南アジア、オセアニア地域の教科書を検討しました。最近教科書問題というと、もっぱら慰安婦問題や靖国神社問題ですが、そもそも中国人は海をどう見ているのか、あるいは台湾人はどう見ているのか。フィリピン人、インドネシア人はどうか、これらについて子供たちがどう教えられているのかこれまで分からなかったので、手分けして、それぞれの国の方、あるいはその国の専門の方に教科書の歴史・地理・国語等の教科書を分析していただき、海へのイメージがどのように作られているのかをまとめました。人々の海に対する現状認識を踏まえないと、未来は構想できないように思います。

(1) 日本の世界史的立場の変化（アメリカへのキャッチアップの終わり）

さて、20 世紀末から 21 世紀にかけて、日本の国際社会に占める地位が変わりました。

明治維新一昭和期の日本は、欧米をモデルにして欧米にキャッチアップする国でしたが、平成期の日本は、アジア地域間競争のリーダー格の地位に転身しました。日本の国際的地位の大転換を画する出来事は、円とドルの為替を大幅な円高・ドル安に変えた 1985 年のプラザ合意です。

プラザ合意は「欧米へのキャッチアップ」という近代化の分水嶺を越えました。1960 年代の繊維、70 年代の鉄鋼、造船、80 年代の自動車、家電で、Japan as No.One の地位を確立し、日本製品は、アメリカ製品を価格・品質において凌駕しました。アメリカはそれに屈服し、日本製品のアメリカ市場参入を増やさないように、円高を求めたのです。1985 年に 1 ドル 240 円であった為替は、2 年後には 1 ドル 120 円に、数年後には 80 円にまでになりました。プラザ合意以後、日本製品の価格は 2 ～ 3 倍にはね上がり、アメリカ市場から締め出されかねない状態となりました。

その結果、日本は安い労働力を求めて、近隣のアジア諸国に資本を投下し、技術を移転し、人材を派遣して、東アジア地域経済の高度化を図りました。1980 年代、急速に変貌する東アジア地域を、世界銀行のレポートは「東アジアの奇跡」（世界銀行）と形容しました。GDP で世界第二位の日本、「世界の工場」にのし上がる中国、自由貿易圏に向けて着実な歩みを進める ASEAN 域内の経済的相互依存関係を一段と深める東アジアは、その存在感を年を追うごとに強めています。

1960 年代に日本が高度成長を経験し、70 年代に NIES（韓国・台湾・香港・シンガポール）の経済が伸び、80 年代に ASEAN（東南アジア諸国連合）の経済が伸びた。90 年代に中国が加わった。ほぼ 10 年ごとに日本→NIES→ASEAN→中国と「雁行形態」で発展してきたのです。現在

の日本の貿易総額にしめるアジアの割合は5割、アメリカは2割にすぎません。アジア地域間の競争と協力とが、日本にとって最大の課題となったのです。

(2) 文明としての自覚 (東西文明の調和した文明的存在としてのリーダー)

21世紀の日本は「文明」としての自覚を求められています。

「文明」をキーワードにして国際政治を考える火付け役になったのはサミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」論でした。ハンチントンは現代世界には七つ（可能性としてのアフリカ文明をいれれば八つ）の文明があると論じました。七つのうちアジアには日本、中華、ヒンドゥー、イスラムの四つの文明があります。そこに「日本文明」が入っています。日本を文明の単位とみるのはハンチントンに限りません。それは世界の知識人の常識です。現代世界に占める日本のプレゼンスは、日本人が想像している以上に大きいのです。ハンチントンは『文明の衝突』（集英社）の日本語版への序文で「日本文明は基本的に中国文明と異なる。日本文明は西欧文明と異なったままである。日本は近代化したが、西欧にはなかった」と記しています。「一衣帯水」「同種同文」などの表現で日本と中国が安易に一体化できると思うのは幻想です。日本は中国とは文明の構造が異なります。日中友好は同質性を強調することによってよりも、異質性を踏まえて進めるほうが建設的だと考えます。日本は基本的に、中国文明はもとより、他の諸文明とも異なる独自の文明だ、という自覚に立たねばなりません。中国は大陸国、日本は海洋国です。韓国は、両者の中間に位置し、大陸性と海洋性を兼ね備えた半島国です。韓国もまた、中国とも日本とも異なる独自の文化をもつ国として尊敬されなければなりません。

(3) 国の体系 (力の体系・利益の体系・価値の体系)

国は3つの体系から成ります。力の体系、利益の体系、価値の体系です。

力の体系とは、国民の安全を保障する軍事力であり、国家は必要最小限の防衛力を備えていなければなりません。利益の体系とは、国民を貧困から守る経済力です。価値の体系とは、国民に文化的アイデンティティが共有されていることです。これら3つの体系はいずれもゆるがすことができません。

しかし、近代日本の歩みにおいては、それらの重点が移っています。明治維新政府は「富国強兵」をスローガンにしました。19世紀当時の世界は帝国主義の時代であり、列強は軍事力にものをいわせ、植民地獲得競争をしました。日本もその仲間入りをし、アジア地域に軍事的に侵略したのです。日本は第二次世界大戦で敗戦し、戦後の日本は、軍事力は「アメリカの核の傘」のもとで、経済大国をめざしました。現在の日本は、アメリカに次ぐ世界第二位のGDPを誇っています。一方、日本人は「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」を求めるようになっていきます。

そこに安倍内閣が登場し、「美しい国づくり」をスローガンに掲げました。文化力を挙げようというのです。このように日本は、戦前の軍事力→戦後の経済力→21世紀の文化力というように国の力点の置き所を変えてきたのです。

現在の日本文明は、「力の文明」から「美の文明」へという過渡期にあります。もはや、日本の国是は「富国強兵」ではありません。20世紀末の小渕内閣が掲げた「富国有徳」が日本の国是です。

（４）日本の未来像「ガーデンアイランズ」

日本は富国有徳の美しい国づくりをめざしますが、美しい国づくりのたたずまいは「ガーデンアイランズ」と形容できます。これは1998年に橋本内閣のもとで策定された第5次全国総合開発計画『21世紀の国土のグランドデザイン』で謳われた日本の国土の将来ビジョンです。日本

は南北に長い列島で、6,852 の島からなります。海に開かれた海洋国として、海を大切に作る美しいガーデンアイランズ庭園の島々にしようというものです。

それは近代文明が環境を破壊してきたことの反省に立っています。日本にとっても、国際社会にとっても、転機になったのは、1992 年にブラジルのリオデジャネイロで開催された国連環境開発会議(地球サミット)です。この地球サミットは「生物の多様性条約」「持続可能な開発」「森林原則」などを採択し、人類社会において、地球全体の環境と生命の重視への転機となりました。

冷戦時代は軍事力を拡大し、経済力を強化する競争に世界が二分されましたが、冷戦の教訓は2つあります。そのひとつは、軍事力の拡大は、それを使えば互いに滅びる、ということです。それゆえ、国際社会にとっては軍縮が望ましいのです。もうひとつは、経済力の拡大は、資源の乱開発で自然を滅ぼす、というものです。それゆえ、環境との共生が必要なのです。

1992 年の地球サミットで注目すべきは「生物の多様性」条約です。これは 1972 年のローマクラブの報告と比べると、環境認識が格段に深まりました。ローマクラブの報告では経済資源が重視されました。すなわち人間中心主義でした。しかし、1992 年の地球サミットの「生物の多様性」条約は、人間にとって有用・無用にかかわらず、生物すべての存在意義を認めたのです。これを受けて、ユネスコは 2001 年に「文化の多様性」を宣言し、2005 年に「文化の多様性」条約を採択しました。文化の多様性を重視しつつ、異なる文化・文明に通低する価値は何でしょうか。「緑と水」の賛歌ではないか。「緑」は「生命」の別名ですが、それは地球を循環する「水」が生み出す地上における芸術ともいえます。

日本は「緑」に対して、どのような貢献ができるでしょうか。人間生命にとって重要な環境もまた「緑」、すなわち植物のつくる「緑の景観」

です。人間の手と心を入れた「緑の景観」は「庭」といえます。そこから「庭」に焦点を当てた「ガーデンアイランズ日本列島」というコンセプトが出てきたのです。

日本には庭の文化があります。日本の庭は「景観式庭園」であり、イスラム圏やヨーロッパの左右対称の「幾何学式庭園」と区別されます。もともと 18 世紀に登場したイギリス庭園は景観式です。そこにはケンペル『日本誌』（英訳、1727 年）に紹介された日本庭園の影響があるとみられます。ただし、イギリス庭園と日本庭園には違いがあります。それは「借景」の有無です。日本庭園は借景が有り、イギリス庭園には無いのです。日本人は、人間の手のはいらない景観（自然景観）も庭に取り込みます。山、滝、樹木など、自然は信仰の対象です。庭には、旧約聖書の「エデンの園」、「浄土の庭」のように、人間の理想が託されています。庭は異なる植物群の美しい統一であり、多様なものの統一の中に美があります。ちなみに、日本人の信仰について一言触れておきます。キリスト教は 19～20 世紀の内村鑑三（1861－1930）が「無教会」主義を唱え、仏教では、法然（1133－1212）が「南無阿弥陀仏」という念仏主義を唱えました。これは「無寺院」主義といえるでしょう。無教会・無寺院ともに、偶像崇拝を拒絶するものです。イスラム教の教えと共通するところがありますが、貧しきものが、像を作れないことが共通の理由です。日本人は仏教やキリスト教を、固有の自然信仰に吸収しました。

こうして、日本は何ができるか、を問いかけたとき、国土を庭のイメージで作りかえて世界に貢献するということができるでしょう。日本は島国で 6,852 の島々が南北 3,000km に広がっており、植生は亜寒帯から亜熱帯のものまであります。その景観を「ガーデンアイランズ」にし、「水の惑星」地球をガーデンアイランズにするのが理想です。

そのためには思い切った変革が必要です。

日本は国の形を変えるとき、権力所在地を変えてきました。

日本は主に京都に東洋文明の精華をいれこみ、東京に西洋文明の精華を

いれこみました。

日本の時代区分は奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代というように、権力の所在地名をもっておこないます。これは世界に例がありません。

すでに新しい日本の首都候補地が国会等移転審議会の報告で提言されています。それは栃木県と福島県の県境にある「那須野が原」です。そこに首都機能（立法府・行政府・司法）が移転すれば、明治・大正・昭和・平成の時代は「東京時代」というように総称されるでしょう。「東京時代」とは、東京を根拠地にして、欧米の近代文明を模倣し、受容し、自家薬籠中のものにした時代です。

那須野が原は、栃木県と福島県の県境といいましたが、広く地域の景観でみると、関東地方の平野と東北地方の森林の境界のところにあります。平野と森林との境界には、日本人は古来、そこに鳥居を立て、神社を建立して、その背後にある森林を「鎮守の森」として大切にしてきました。そこで、那須野が原の新首都は「鎮守の森の都」のイメージになるでしょう。

新首都には、外交、防衛・安全保障、通貨管理など、国家主権にかかわる業務が移り、その他、内政にかかわる業務（省名でいえば、国土交通省、農林水産省、文部科学省、厚生労働省、環境省、経済産業省、総務省）の大半は、道州に委譲されるものと見込まれます。英語でいう **devolution** です。英国においては数年前に **devolution** が行われ、スコットランドが準国家のような存在になりましたが、日本でも類似の中央から道州にむけて、権限・財源・人材の移譲が起こるものと見込まれます。安倍内閣は、内閣史上初めて道州制担当大臣を置きました。

日本の道州制については、現在の 47 の都道府県を合併し、国の現在の出先機関の所轄地域に応じて、北海道、東北、関東、中部、北陸、近畿、中国、四国、九州、沖縄の 10 のブロック割りで、これから 5～10 年の間に進みますが、これらのブロック間の格差が大きいので、さらに

再統合が見込まれます。「緑の景観」を基軸にするとほぼ4州への地域割りになると見込まれます。「森の州（北海道・東北）」、「野の州（関東）」、「山の州（中部）」「海の州（近畿・中国・四国・九州）」の4州です。

森の州（北海道・東北）」はカナダ並みのGDPをもちます。その州都は北海道の千歳空港と札幌の中間地点。

「野の州（関東）」はフランス並みのGDPをもち、その州都は東京ないし大宮（現在のさいたま市）。

「山の州（中部）」はカナダ以上のGDPをもち、その州都は多治見・土岐・瑞浪あたりと見込まれます。

「海の州」はイギリス並みのGDPをもち、その州都は瀬戸内海に浮かべるのも一案です。それは東アジア共同体の未来の本部のモデルとすることができます。というのも、東アジア共同体は、海の共同体だからです。

現代の海はもはや単なる自然ではなく人間の営為の対象であり、経済的意味合いをもっています。海洋資源・海底資源を視野にいった海の保全が共通利害になりうる。海洋東アジアからオセアニアにかけて無数の美しい島々からなる西太平洋の津々浦々をネットワークで結ぶことが重要です。西太平洋津々浦々連合を目指すことが共通目標になりえます。古代メソポタミアの「肥沃の三日月地帯」の陸の文明地帯は、目下、争いの渦中にある。われわれは「豊饒の海の三日月弧」に平和な「海の文明」を実現するとき、本部は海に浮かべるという構想をもつこともできるのです。

（5）東アジアは海の共同体（「海洋東アジア」「東アジア海」）

さて、東北アジア（日・韓・中）と東南アジアとは、両者をあわせて「東アジア」といわれます。あるいは「ASEAN（東南アジア諸国連合）プラス3（日・韓・中）」ともいわれます。この「東アジア」では、自由貿易協定（FTA）などを通じた経済的連携の強化を基礎にした政治的・文化

的連携が模索されています。そこに「東アジア共同体」ができるかどうかは課題です。

「東アジア」は 20 世紀最終四半期にプレゼンスを急速に高め、欧州連合（EU）、北米と並ぶ世界の三極の一つになって 21 世紀を迎えています。経済的連携に裏打ちされない共同体構想は、いかに魅力的でも、画餅に終わります。しかし、政治的構想をもたない共同体構想に力はありません。一方、文化的理想をもたない政治的連合は長続きしません。

ASEAN においては、その淵源が政治的結束であったことにより政治的連携はそれなりに見られますが、経済的連携が中心です。

北東アジアにあっては、日韓の良好な政治関係をのぞけば、日中関係、韓中関係ともに、安定しているとはいいたくないと思います。

そうした現状を踏まえて歴史を顧みつつ、この東アジア地域が 21 世紀に作りあげるべき文明の骨格を「日本文明」にひきよせながら、さぐってみたいと思います。

東アジアと西洋とのシルクロードを通じた古代にまでさかのぼれます。しかし、東アジアが西洋人の視野にとらえられたのはマルコ・ポーロの『東方見聞録』によるといってよいのです。その記述の大半は中国についてであり、日本情報は全体の 1 パーセントにも満たません。しかし、ヨーロッパの人々に影響を与えたのは、中国情報よりも日本情報でした。

マルコ・ポーロのもたらした日本情報は、ジェノヴァ出身のコロンブスの冒険心に火をつけたからです。コロンブスは「黄金の国（ジパング）」を目指しました。この航海がきっかけになって、「大航海時代」「地理上の発見期」と形容される 16 世紀の幕が開かれたのです。

「黄金の国（ジパング）」というのは、もとより、誇大表現です。ただ、根拠はありました。それは中尊寺の金色堂に往時の栄華をとどめる 12 世紀に藤原清衡（きよひら）、秀衡（ひでひら）、基衡（もとひら）の三代にわたって花開いた奥州平泉の黄金文化です。その情報が元朝にも

知られており、それが元寇をおこしたフビライの動機でもありました。

偶々、西洋の大航海時代は日本における大鉱山開発期と重なり、16世紀の日本は未曾有の黄金を持つ国になっていました。ヨーロッパ人の黄金郷（エルドラード）への憧れを日本は裏切らなかったのです。南米・中米で発見された金銀と16世紀末に黄金太閤（豊臣秀吉）を生み出す日本のそれとが匹敵するものであったことは疑いありません。

大航海時代の記憶は日本に開国を迫ったペリーの脳裏にもしっかりと刻まれていました。ペリーはその『日本遠征記』（岩波文庫）の序論にこう書いています―「アメリカが図らずも、コロンブスの企図した事業の一部分を遂行し」、ペリーは「（自分こそが）ジパングをヨーロッパ文明の勢力範囲に引き入れようとするコロンブスの望みを満たしてやったのである」と。

ペリーは当然ながらアメリカをヨーロッパ文明の一員だと自覚していました。では、日本を野蛮とみなしていたのでしょうか。いや、逆です。「（日本は）制度として他の国々の交通を禁じながら、（日本人は）一定の文明と洗練と知力とを有する状態に達している国民」だと同じ序論に書いています。ペリーは来航前から、日本人が「知力」に満ち、日本を「洗練」された「文明」とみなしていました。それは彼が来日に先立ち、江戸時代に長崎に来て日本社会を垣間見たヨーロッパ人（ケンペル、ツンベルグ、ティチング、ドゥーフ、シーボルト等）の日本観察記を読んでいたからです。鎖国時代の日本及び日本人に接して、日本人に敬意を表し日本を文明とみなさなかった西洋人はいないのです。

近代文明を誇る西洋人のアジア蔑視の目に耐えられたのは日本のみです。日本は西洋諸国を「列強」すなわち「力の文明」とみしました。一方、日本の華は、ペリーの洞察にあるように、国民の「知力」と社会生活の「洗練」であって、経済力や軍事力といったむき出しの力の誇示だったわけではありません。ペリー以後の西洋人の日本観察はきわめて多数にのぼりますが、その記録を渡辺京二氏が『逝きし世の面影』に見事にまと

めているのですが、それを要約すれば、西洋人は江戸期日本の面影（自然景観・生活景観）の美しさに一様に嘆賞した、ということです。一言でいえば、日本は「美の文明」でした。日本は「美の文明」として西洋列強の「力の文明」と対峙していたのです。日本は西洋列強の「力の文明」に魅せられて富国強兵にのりだしました。一方、「美の文明」の魅力は国境を越え、開国後に紹介された日本の生活文化は 19 世紀末の西洋人の美意識に深甚な影響を与え「ジャポニズム（日本趣味）」の流行を生んだのです。

なぜ、日本は「美の文明」たりえたのでしょうか。中国文明を含む他の諸文明は自然破壊の歴史で特徴づけられるのに対して、稀有なことに、日本は森と水を生かしながら文明を築いたからでしょう。森林の保全すなわち治山が豊かな水を生み、その治水を通して土地の生産性を世界一に押し上げ、無数の河口の汽水域（淡水と海水の混じるところ）には豊かな漁場を作り出しました。また河口には港町が形成され、港同士が海を通してネットワークを形成しました。「津々浦々」という言葉は中国や韓国など他の漢字文化圏にはありません。「津（港）」が「浦（海）」で結ばれている海洋的性格がおのずから「津々浦々」という言葉を生んだのです。それは日本が誇るべき特徴的表現です。

ここで、気づくべきことがあります。それは、津々浦々の関係が日本で閉じられていないことです。「ASEAN プラス 3」は津々浦々の関係です。三極のうち EU と北米とは大陸です。それに対し、東アジアは、日本が南北に長い島国であり、朝鮮半島の韓国は三方が海に面し、中国で発展しているのは沿岸部、東南アジアは多島海です。

東アジアというと、中国大陆が大きいので、陸のイメージがもたれがちです。しかし、経済的連携を深めているのは陸の東アジアではなく、海の東アジアです。そこで、この地域を「海洋東アジア」と名づけましょう。

また、東北アジアと北東アジアという名称がともに使われますが、漢字圏では「東西南北」というように、東西を先に立てます。それゆえ「東北アジア」というのが適当だと思います。欧米流では‘Northeast Asia’というように南北を先に立て、それをそのまま訳せば「北東アジア」になりますが、すでに‘Southeast Asia’を「東南アジア」と呼称しているので、統一を図るうえでは「東北アジア」のほうがよいと考えます。

(6) 国名を冠した東アジア海のいくつかの海の名称の変更

東アジア海には、国名を冠した海が3つあります。「日本海」「東シナ海」「南シナ海」の3つです。東アジア共同体をつくっていくには、国名は好ましくありません。そこで次のような提案をしてみたいと思います。

「日本海」については、韓国から「東海」という名称が提案されていますが、日本から見れば西にあたるので適切ではありません。また「青海」という名称も提案されています。これは「黄海」との比較から生まれた言葉でしょう。しかし、海が黄色いのは黄土がながれこむ「黄海」に特有のもので、本来、世界の海は青いです。それゆえ「青海」は海域の固有性を欠きます。

むしろ、東アジアが「海洋東アジア」ないし「東アジア海」という特徴をもっていることに照らすと、次のようにいうのが適切と考えます。

「日本海」→「北の東アジア海 (North East-Asian Sea)」

「東シナ海」→「中の東アジア海 (Middle East-Asian Sea)」

「南シナ海」→「南の東アジア海 (South East-Asian Sea)」

(7) 東南アジアの重要性

東アジア地域は、活力に満ちた経済圏として、その動向は 21 世紀の国際社会の行方も左右しかねない重要な圏域に育っていますが、注目したいのは、現在発展しているのは、大陸アジアというより、海洋アジアだということです。

それに対して、E U と北米とは大陸です。

日本は南北に長い島国であり、韓国は三方が海に面し、中国で発展しているのは沿岸部、東南アジアは多島海です。つまり東アジアの実態は「海洋アジア」です。

それゆえ、東アジアには「海」の観点がいるのです。

「大陸アジア (Continental Asia)」と区別された「海洋アジア (Maritime Asia)」という観点を強調したいと思います。

「海洋アジア」は3つの海域からなる。「東アジア海」「南アジア海」、それに両者の中間にある「東南アジアの多島海世界」である。

海洋アジアの中心は、地理的にも歴史的にも東南アジアです。東南アジアは多島海世界であり、津々浦々世界です。タイは内陸国家のように見られがちだが、実はタイも例外ではありません。石井米雄氏はタイの特徴を「港市国家 (Port-Polity)」とよんでいます。海から内陸に 80 km のところにアユタヤという都市がありますが、アユタヤ王朝 (1351-1767) はチャオプラヤ川に面した商業国家、交易国家、貿易国家でした。その下流にあるバンコクに都を移したバンコク王朝はいうまでもありません。東南アジアは、それと自覚されたわけではありませんが、歴史的に自由貿易圏としての特徴をもってきました。

「東アジア共同体」構想に、東南アジアは関心を示しています。東南アジアは ASEAN としてまとまっていますが、1997 年の金融危機を契機にして、東北アジアとの結びつきを模索し、東アジア共同体構想が出てきた。FTA のイニシアチブは東南アジアから始まりました。シンガポールが日本に呼びかけたのがきっかけです。ASEAN が牽引役なのです。われわれは「東南アジア」の地位を今一度再考しなければなりません。

「海洋アジア」の近代文明史における役割は小さくありません。「海洋アジア」のインパクトに対するレスポンスとして近代文明が登場したとみられるからです。「南アジア海」のインパクトに対するレスポンスとして西ヨーロッパに近代産業文明が勃興し、「東アジア海」のインパクト

に対するレスポンスとして日本に近代産業文明が勃興したのです。西と東の近代文明は東南アジアという共通の母胎から生まれたのです(川勝平太『文明の海洋史観』)。

(8) 南北合従 — 縦に飛ぶ「西太平洋津々浦々連合」

「海洋東アジア」こそ日本や韓国の属するアジアです。21 世紀の日本と韓国は「海洋東アジア」の中核にある存在としての自覚をもって「海の文明」を模索するべきです。

「海洋東アジア」は閉じられた世界ではありません。その南には海洋東アジアとの経済的結びつきを深めているオセアニアが隣接しています。海洋東アジアとオセアニアとからなる西太平洋には、無数の島々が三日月状に分布しています。西太平洋は、美しい多島海として知られるエーゲ海にまさる世界最大の多島海を形成しているのです。人種、宗教、民族、文化もきわめて多様です。それゆえ、この西太平洋は「水の惑星」地球のミニチュアです。共有しうるものは海です。

現代の海はもはや単なる自然ではなく人間の営為の対象であり、文化的意味合いをもっています。海洋資源・海底資源を視野にいたした海の保全が共通利害になりえます。海洋東アジアからオセアニアにかけての地域において、美しい島々からなる「西太平洋津々浦々連合」の形成を目指すことが課題です。古代メソポタミアの「肥沃の三日月地帯」はイラク戦争のただなかにあります。陸の文明地帯における争いの歴史を過去のものとし、豊饒の海である「西太平洋の三日月弧」に、太平洋 (Pacific Ocean) の名にふさわしい平和の「海の文明」の実現に向けて日本は努力するべきです。

それには新しい学問がいります。日本には留学生の数が 10 万人を超え、アジアの留学生が 9 割を占めている。東アジアの学生が大半です。東アジア研究機関の本部を沖縄にもってくるのも一案です。それによって沖縄は「軍事の砦」から「平和の砦」に変わるでしょう。

（９）東北アジア（日本・中国・台湾・韓国）

東北アジアは、ヨーロッパが近代文明を建設する過程において、際立った３つの特長をもっていました。

第一に、世界史において欧米列強の植民地にならなかった唯一の地域です（香港とマカオは、それぞれイギリス、ポルトガルの植民地になったが、いわば点的存在であり、他のアジア地域が面的支配を受けたのと区別されます）。その点で、東北アジアは東南アジアとは区別されます。

第二の特徴は「**Pax Asiana**」ともいうべき平和を享受したことです。

* 東北アジアに通底する価値規範としての「徳」

17世紀以後、北東アジアが欧米文明と出会う19世紀にいたるまでの時期に、清朝の中国ではもとより、朝鮮王国でも、江戸時代の日本でも、「中華」意識を共有しました。「中華」とは、現代語に直せば、「文明」です。その文明のエッセンスは、日韓中三国の知識人の共通の教養であった四書（『論語』『孟子』『大学』『中庸』）の一つ『大学』にあります。すなわち「古（いにしえ）の明德を天下に明らかにせんと欲する者は、先ずその国を治む。その国を治めんと欲する者は、先ずその家を斉（ととの）う。その家を斉えんと欲する者は、先ずその身を修む。その身を修めんと欲する者は、その心を正しくす。その心を正しくせんと欲する者は、先ずその意を誠（まこと）にす。その意を誠（まこと）にせんと欲する者は、先ずその知を致す。知を致すは物に格（いた）るに在り」というものです。

この哲理に見られるように、東北アジア三国は、「中華」すなわち「文明」意識をもって、霸道ではなく、王道をもって国を治める徳治主義に立っていました。それは「格物致知」という学問を中心とした国づくりです。学問立国、王道主義が東北アジア三国で共有されていました。17世紀後半から19世紀後半にいたるまで、北東アジア地域は、それぞれ「パックス・シノニカ（清の平和）」「パックス・コリアーナ（韓国の平

和)」「パックス・ジャポニカ (日本の平和)」—江戸時代の平和を、時にパックス・トクガワーナ (徳川の平和) と呼ばれることもある—とも呼ぶべき、平和を現出しました。徳に依拠した「平和の伝統」こそ、北東アジア地域が再生するべきものです。第二の「パックス・アシアーナ (アジアの平和、Pax Asiana)」の実現をめざすべきでしょう。

なぜ「徳」を強調するのか。それは 17 世紀以後の欧州との対比において際立つからです。欧州では 1625 年に国際法の父といわれるグロティウス (Hugo Grotius) が『戦争と平和の法』を著し、国王による防衛戦争を正当とする「交戦権」を主権の一つとして認めました。その思想が 1648 年のウェストファリア条約で具体化され、それ以後の欧州各国は「防衛」の名のもとに、つぎつぎと戦争をおこし、戦争のない年を見つけるのが困難な時代に入りました。欧州諸国の特徴は、霸道であり、むき出しの軍事力を国家権力の基礎にすえたのです。

つまり、17 世紀以後、東北アジアが徳による王道 (モラル・ポリティックス) を展開したのに対し、欧州は霸道 (パワー・ポリティックス) を展開し、「力の均衡 (balance of power)」でかろうじて平和を保ったのです。

第三に、17 世紀後半から 19 世紀の北東アジア三国に共通したのは人材を育成するという思想です。『大学』にいわく、「君子は先ず徳を慎む。徳あればこれ人あり。人あればこれ土 (ど) あり。土あればこれ財あり。財あればこれ用あり。徳は本 (もと) なり。財は末 (すえ) なり。本 (もと) を外 (ほか) にし末を内 (うち) にすれば、民を争わせ奪うを施す」と。

これは富の基礎が人にあり、徳をもつ人材の要請を説いたものです。人材を育成することが富国への道です。富国の基礎は有徳です。一言でいえば「富国有徳」です。それは、同時期のヨーロッパ各国が富国強兵であったのと対照的です。北東諸国が富の基礎を徳に求めたのに対し、欧州諸国は富の基礎を力に求め、軍事力を強化しました。この富国有徳

の思想があったればこそ、「Pax Asiana アジアの平和」が保持されたものです。

日本は戦前期に西洋文明を受容し、「富国強兵」路線に乗り換えしました。覇道主義になり、欧米列強と肩を並べる一等国をめざし、大英帝国を模範として大日本帝国の建設に走りました。そのことにより、近隣のアジア諸国に多大の被害を与えました。その反省に立つとき、われわれは徳を基にした豊かな国づくり「富国有徳」路線に立ち返らなければならないのではないのでしょうか。「富国有徳の Pax Asiana 」が北東アジアの理想です。

最後に、海上自衛隊ないし自衛隊には、憲法問題に絡めてアレルギーを持つ人がいますが、海上保安庁、名前を改めたジャパン・コースト・ガードに対しては、国民の間にそれはありません。むしろ、長年の実績で信頼を得ており、国際的にも、たとえば東南アジア諸国から高い信頼を得て、海賊取り締まりなど信頼醸成のための協力活動を一緒にやりたいと要請されています。自衛隊よりも、海上保安庁のほうが平和部隊として国際貢献するうえで日本にとって大事かもしれません。ただ、海上保安庁の予算はきわめて少ない。そこは問題ですが、将来的には、各国の軍隊が国際警察に変わることが望ましい。海の警察としての各国の海上保安庁同士の国際協力は、その意味で将来を先取りする形であり、重要です。海上保安庁のアジアの海での活躍については、もっと知られるに値します。

それだけに「南北合従の西太平洋津々浦々連合」構想について、海上保安庁の関係の方々には、将来ビジョンのひとつとして、考えておいていただきたいのです。西太平洋にはたくさんの弱小の島国がありますが、そうした小さな島嶼国家に「軍事力」は似合いません。しかし警察力はいます。島国は平和と安全を求めており、南太平洋の島嶼国家は皆親日的です。そことは、経度がほとんど同じなので時差がありません。南

北の合従とは経度連合でもあります。一方、東西の連衡をどうするかについては、中国とロシアの間にあるシルクロードに注目すべきです。シルクロードは遊牧民の幹線であり、そこにいる人たちを中国人は嫌い、ロシア人も嫌っています。中国人もロシア人も農耕民であり、遊牧民とは相性が悪いのです。歴史的に敵対することが多かったからでしょう。ところが、不思議なくらい、シルクロードの国々の人たちは親日的です。日本人のほうもシルクロードに夢を抱いています。遠い昔、正倉院の御物にあるように、古代日本にはシルクロードを伝わってきたものがあり、遠い記憶のなかで懐かしい感情をかりたてるようです。シルクロードにはたくさんの国があります。中小国ですが、ヨーロッパまで通じています。東西の連衡においては陸の草原の道に軸心をおいたシルクロード外交を展開する。そして南北の合従においては、世界最大の多島海である西太平洋津々浦々連合を推進する。シルクロードの東の要、西太平洋津々浦々の北の要が日本です。日本列島を景観によって4つの美しい州にわければ、やがて中国が一国多制度を、目下は一国一制度にしようとしているわけですが、あの国がひとつになるのは誰も望ましいとは思っておりませんので、日本が一国多制度になると、中国も考え直すでしょう。インドネシアでは東チモールだけでなく、いくつかの地域が自立しても大丈夫だというメッセージになります。フィリピンではルソンとビサヤとミンダナオでそれぞれ自立しても大丈夫だというメッセージになります。国民国家を超える模範を日本は示すべき立場にあります。最後はちよつとはしりましたが、「海の州」の州都を海に浮かべるという構想を実現しておく、やがて東アジアの海の共同体の本部をどこに置くかが論点になるとき、海に浮かべている先導的モデルになります。北京に置くか、ジャカルタに置くか、シンガポールに置くか、東京に置くかなど、本部誘致争いをせずに済む、海が共有財産になったときに初めて、東アジアの海の共同体ができます。それまでは沖縄あたりを東アジア共同体の本部にすればどうかという提案をすればいいかと存じますが、東アジ

ア共同体が本当にできるとき、これは地球の海が平和になるときであつて、その本部は一箇所である必要はありません。海の共同体の本部は海に浮かべておけばいいでしょう。ペルシャ戦争のときにアテネは陸での居場所がなくなり、アテネの民は 200 艘ばかりの船で海に浮かび、そしてテミストクレスが「海」それがアテネであり、海に浮かぶ船がある限り、アテネはアテネであるという名言によって、彼の作戦をとりいれ、サラミスの海戦で勝利を収め、古代ギリシャの黄金時代を築きました。この故事に倣うことになれば、西洋も感心するでしょう。私は海の州の州都をそのような脈略で考えております。

お聞き苦しかった点につきましては、私の話は露払いということでございますので、お許し願います。ご清聴いただきましたこと、心より御礼申しあげます。ありがとうございました。